

大阪大学グローバルCOE コンフリクトの人文国際研究教育拠点研究プロジェクト

オルタナティブ・ジャスティスの世界的動向に関する共同研究

公開研究会（第7回研究会）

大阪大学コンフリクトの人文国際研究教育拠点における研究プロジェクト「オルタナティブ・ジャスティスの世界的動向に関する共同研究」では、上智大学アジア文化研究所・准教授 福武慎太郎氏をゲストにお招きし、下記のとおり、公開研究会（第7回研究会）を開催いたします。

記

【日時】 2009年6月20日（土）13:30-18:15

【会場】 大阪大学大学院人間科学研究科東館1階105講義室

【プログラム】

13:30-13:45 開催趣旨説明

加藤敦典（日本学術振興会特別研究員・南山大学）

13:45-14:45 ディスカッション1

福武慎太郎氏の論文「略奪婚—ティモール南テトゥン社会における暴力と和解に関する一考察」をめぐって 問題提起：石田慎一郎（大阪大学）

14:45-15:00 休憩

15:00-16:00 ディスカッション2

福武慎太郎氏の論文「国民和解を想像する—東ティモールにおける過去の人権侵害の裁きをめぐる二つのローカリティ」をめぐって 問題提起：高野さやか（東京大学）

16:00-16:15 休憩

16:15-18:15 講演

講演者：福武慎太郎（上智大学）

題目：紛争調停における儀礼の役割——東ティモール村落社会における和解実践を事例として（講演要旨は下記参照）

コメンテータ：久保秀雄（京都産業大学）、馬場淳（日本学術振興会特別研究員・東京外国語大学）

【問い合わせ先】

石田慎一郎 大阪大学大学院人間科学研究科

電子メール：ishida@hus.osaka-u.ac.jp

【福武慎太郎氏講演要旨】

東ティモールの村落社会における複数の和解実践を事例として、村落共同体における司法手続きに伝統的な和解儀礼を採用することの今日的意味について考察する。インドネシアからの独立の是非を問う住民投票とその後の騒乱(1999年)に前後し、地域住民主体の和解の取り組みがみられた。また、ポルトガルからの独立過程でおこった内戦、そしてインドネシアによる軍事侵略および統治下でおこなわれた人権侵害に関する真相究明をおこない、国民和解を促進することを目的として設置された東ティモール受容・真実・和解委員会(CAVR)は、共同体レベルにおける和解を促進するために住民主体の和解手続きを一部採用した。この和解の手続きは、殴打や窃盗などの軽犯罪に限定し、被害者と加害者が直接対話することを通じて住民主体による解決を認める制度であった。共同体の伝統的な解決法であることを謳い文句にしているとおり、紛争当事者が席をともにし、村の長老が儀礼を執り行い、共に食事をするという形式をとっていた。本発表では、こうした独立派と二つの反独立派住民の間でおこなわれた複数の和解実践をとりあげ、和解の成立／不成立の背景にある要因について明らかにすると同時に、伝統的な儀礼の形式を採用することが地域住民にとってどのような意味を持っているのか考察を試みたい。

【福武慎太郎氏略歴】

名古屋市立大学人文社会学部准教授を経て、2009年より上智大学アジア文化研究所准教授。専門は文化人類学、国際協力論。2008年、上智大学より博士号取得。おもな調査地はインドネシア領西ティモールと東ティモールの国境周辺社会。紛争、難民、和解に関するフィールドワークをおこなっている。国際機関、国家、NGOなどが展開する平和構築・人権支援言説と、現地社会における和解についての解釈の転換を民族誌的視点から分析している。また、2001年から1年間、国際保健医療協力をおこなうNGO「シェア=国際保健協力市民の会」の地域活動担当者として東ティモールに駐在し、エルメラ県における保健教育プロジェクトの立ち上げに関わった。その経験をもとに開発NGOの民族誌的研究もおこなっている。近年の主要業績としては、「略奪婚—ティモール南テトゥン社会における暴力と和解に関する—考察」(『文化人類学』第72巻1号、2007年)、「ティモール南テトゥン社会の民族誌—紛争、難民、和解に関する人類学的考察」(博士論文、上智大学、2008年)、「国民和解を想像する—東ティモールにおける過去の人権侵害の裁きをめぐる二つのローカリティ」(幡谷則子・下川雅嗣(編)『貧困・開発・紛争—グローバル・ローカル相互作用』上智大学出版、2008年)、「開発を翻訳する—東ティモールにおける住民参加型プロジェクトを事例に」(信田敏宏・真崎克彦(編)『東南アジア・南アジア—開発の人類学』明石書店、2009年)などがある。